

滋賀県立近代美術館協議会（第47回）概要

1 開催日時：令和2年2月18日(火) 午後2時00分～午後15時30分

2 開催場所：滋賀県大津合同庁舎7-A 会議室

3 出席者：

滋賀県立近代美術館協議会委員 11名

上野委員、安達委員、島委員、竹村委員、檀原委員、千速委員、十倉委員、
柳原委員、山田委員、吉岡委員、吉野委員（50音順）

事務局

村田館長、木村副館長、青山美の滋賀企画室長 他10名

4 概要

- (1) 令和元年度事業実施状況について
- (2) 令和2年度事業計画について

(事務局) 令和元年度事業実施状況および令和2年度事業計画について事務局より説明。

(委員) 私もいくつかの行事に参加した。特に信楽での「月刊学芸員」で学芸員を中心に話をされた時は、信楽という場所柄、陶芸作品を中心とした作家さんも多いが、そこでギャラリーをしながらプロデュースされている方と一緒に話されたのは、今までのような作品中心の話というよりは、人を中心とした取組を紹介するというので、非常にすばらしかった。

それから、先日もびわ湖アートフェスティバルがびわ湖ホールであり、学芸員がワークショップを担当され、私もコラージュの作品を作ったが、ベースとなる作品にたくさんの準備いただいた作品を貼り付けるということで非常に楽しいプログラムで、子どもたちも大変喜んで参加していた。

また先日、プリンスホテルでアメニティフォーラムというのがあり、学芸員が登壇されて、滋賀県のアートシーンの様子を話され、非常に多方面で活躍されていることが随所で見られて非常にこの1年充実した活動をされたというのを目にした。

また、高島の展覧会へも参加したが、場所というものの歴史、歴史を紹介すると同時に、そこで生まれる、そこでないとできない展示というのを非常に重要視された展示だった。木を輪切りにしたところに色のついたものが後ろから少しずつ染み出して行って木の様子が変わっていく様子が時間とともに映し出されたり、時間の流れとかその土地で生まれたものというものが上手にコンパクトに展示されると同時に、まわりを取り込んだ展示が非常に斬新だった。これからも続けられるといい。また、草津で実施された金谷展でのワークショップでは、表具の方が来られ本格的な鍵になるところの折り目のところとか和紙を使って作るのか、みんな知らなかった体験を実際にできるのは、本職の方が来られないと中々できないし、非常にレベルの高い発信でよかった。これからも楽しみにしたい。

(委員) この機会に注文したい。一つは、安曇川で行われたアートスポットプロジェクトへ非常に行きたかったが残念ながら行けなかった。なぜ行けなかったのか色々考えてみて私の都

合もあるが、安曇川駅から会場までバスがない。滋賀県の方は車で来るだろうという発想をするが、私は京都だし、高齢の方で車では行けない人もいる。安曇川駅から会場までの足をどうするか考えて、行けなかったということもある。

そこで、お金がかかることも分からないが、妻有（新潟県越後妻有：アートトリエンナーレ会場）とかでやっているように、小さなバスをチャーターして参加者を募って、お金を取ればいいと思う。日にちを決めて、ホームページで募って、作家さんと一緒にバスに乗り込んでお話を伺ったりしたらもっと面白かったのかなと思った。これは、勝手な思いつきだが、次が能登川のどこかわからないが、そういったことを考えてほしい。先立つものがあるので、その辺の兼ね合いも考えて、毎日出す必要はないが土日だけでも。そういうことを考えて、機会をつくってほしい。

もう一つは、「よもやま講座」だが、学芸員の漫画の話の聞きに行き、非常に面白かったが、二つ注文したいことがある。

一つは、私は学芸員の講座があることを知っていたから申し込みができた。知らなかったら、申し込みをどこでしたらいいのかわかりにくい。ホームページからと書いてあるが、ホームページのどこを見ていいかわからなかったのも、ちょっと入口の所で損しているなど思った。我々もそうだが、得てして知っている者は、当然ここに来るだろうと思うかもしれないが、通りすがりの人間は、気付かないこともあるので、目立つように申し込みしやすいように工夫してほしい。それから、漫画というテーマなので若い人が結構来ていると思っていたが、我々高齢者が多かった。これはこの講座に限らずどこに行っても高齢者だらけだ。若い人をどう掴むか考えているが、今回、漫画というテーマなのに若い人があまり来てもらえなかったのは残念だ。いいことやっているから人が来るという時代じゃない。それでもなおかつ人に来てもらうには、色んな工夫が必要で、今は工夫の競争になっているから、その辺を考えてほしい。

今度の「アートにどぼん！」は、長浜で行われるが、長浜といえど年に一回アートフェスタをやっているが、それとは連動しないのか教えてほしい。

(事務局) 「アートにどぼん！」に関して、長浜市とも話をしてアートフェスタとの連動という案も当初あったが、アートフェスタ自体で人が多すぎて、「アートにどぼん！」も結構たくさん来られるので、あまりにパンクするかなということもあり、あえて時期を9月にずらすような形になった。

ただ、実際のプログラムを検討する際には地元のアートフェスタの方々にも参加いただき、長浜のコンテンツと美術館が用意するコンテンツと、あと県内各地で活動されている方、そういったものも組み合わせて、一つのイベントにできればと思っている。

(委員) 例えばバスは、やはり皆さん求めているところで、越後妻有は最初バスなんかなかった。ほんとに山奥へ自分の見たい所へ訪ねていくというのもひとつの醍醐味であったが、やはりバスも欲しいということで出るようになった。少し考えていただければ、多分相当面白い企画なので、もしそういうお金があれば、ぜひ試みられたらいいんじゃないか。

それから、いろんな魅力的な講座をやっておられて、休館ならではのすごい活動だと思う。色んな所で広報を出すと、あまりたくさん来ていただくと困るという話かもしれないが、本当にいい活動だと思っている。

(委員) 休館中だからこそやれることがあるということが、先程の説明でよく分かった。本当にたくさんの子育て世代、地域の人達が、アートに触れる機会をたくさんつくっているということがよく分かった。

もっとこれから若い世代の人たちを巻き込むということだが、やはり子育て世代の人達、若い世代の人達は、SNSを活用する。情報をキャッチするのは、インスタだと思う。再開館準備の情報発信の中にSNSは入れているのか、もしくは今既にあるのか。

特に私が素敵だと思ったのは、アートスポットプロジェクトという滋賀の良い場所で、素敵なアートの体験ができたことだ。もっと子育て世代とか、子供とか、私達母親とか、そういう人達にも触れる機会があったらいいと思うので、それをインスタ等で表現していくといい。今、インスタグラムやフェイスブックは、やっているのか？

(事務局) 公式ツイッターはあるが、インスタグラム等はやっていない。実はツイッターもみんな片手間で思い立った時にやっているようなところもあって、開館に向けたプロモーションという意味では、もう少し力を入れてやっていきたい。

(委員) 私が今日の報告を伺ってとても印象的だったのは、美術館の地域連携プログラムで、これだけたくさんプログラムを実施していて、累積3万人以上の方々が参加されているということだが、ここの美術館のロケーションがやや不利であるとか、どうやって来館者数を増やすのかということに苦労話も色々あったと思う。今度、再開館しても立地条件は変わらないけれど、何らかの形で館外での活動を継続してもらえれば地道にファンを増やすことに繋げていけると思う。この実績は、とても大きいのではないかという印象を持った。

(委員) 休館中ということで、県外の美術館への貸し出しが、昨年度と今年度、一年間随分大変だったと思う。ほぼ同時に四つ、これだけ同時に所蔵品が動くというのは、普通に開館している時でもこれだけ動かないので大変だったと思う。ちなみに新年度にこれを継続する部分はあるのか。

(事務局) 志村ふくみ展の姫路市立美術館開催の分は新年度に入ってからになるが、それ以外は巡回展としては終了している。

(委員) それから、例えばアートスポットプロジェクト、これもとてもすばらしい。それと「月刊学芸員」ですね。いつも案内をいただいているながら、中々、金沢からは参加できないが、楽しそうだなと思って見ていた。こういうのも短いレジュメ、A4一枚くらいでも、まとめたものをホームページにアップするといいいのではないか。トークしたものを全部載せると文字起こしとかが大変になるので。レジュメがあると行けなくても後でこんな話あったのかなと分かる。そうすると、この学芸員の人に何かの機会に話を改めて聞こうかというきっかけになる。「アートスポット」と「月刊学芸員」は、開館後も継続するのか。

(事務局) 開館する年には、開館までの昨年・今年・来年度で今まで取り上げた作家のみなさんをもう一度集めて再開館の時の新たなコンセプトのもとで、美術館で新作展をやることは検討している。それ以降は白紙だが、色んな方々が開館後、県内の色んな所で継続してほしいというような要望はいただいているので何かしらのレスポンスはしなければならぬと考えている。

(委員) 県内各地を探し出して場所を決めるのは結構大変だと思う。美術館と瀬田駅との間、駅寄りでもいいし美術館の近くでもいいが、ちょっと歩いて行ける距離感で拠点になるような、常時開いていなくてもいいが、そういった所でアーティストがレジデンス的にそこに滞在制作できるような場所があれば、例えば県内で空いている施設でもいいが、まあ水道と電気とトイレ

レぐらいはないといけないが、継続的な拠点として可能性はあるのではないかと思う。そういった所で若手作家が活動し、本館ではちゃんとした展覧会をやって、同時に二つ一緒に見に行こうかという誘い水にもなるのではないかという気がする。

(委員) 年134回の地域連携プログラムをされているということで、私も数回プログラムに参加した。特に「アートにどぼん！」は、子どもを連れて行く機会があったのですばらしいと思う。

今、すごくチャンスだと捉えられると思う。というのも美術館自体が一部リニューアルになっているが、リニューアルしたからには、地域の人に愛される、地域の人々の居場所になるような、学校以外の、仕事以外の、家以外のコミュニティーをつくれるようなつなぎ目として美術館の施設を利用できたらいいと考えている。そういった中で出張プログラムで県内で色々活動されている中で地域の人達の意見と接することが多いと思うので、その中から意見を吸い上げて、全く会わないはずの方達が美術館を通して出会って、また新しいことを発信できるような、そういう役目を持ってほしいと切に願っている。

(委員) 話は変わるが、先程の説明で改修工事についてお聞きするが、常設展示室とか企画展示室の写真があったが、以前のギャラリーはどうなったのか。空間については多目的室に改修になるのか。

(事務局) 基本的には今までのギャラリーとして、そのまま使っていただける。大きく手が入るわけではなく、また使っていただけるように思っている。

(委員) ギャラリーの話が出たので続いてになるが、実は以前もギャラリーは、学校現場で大変お世話になっている。児童や子供達の作品展示等、色んな提供をしていただいている。そうすると子供たちは、自分の作品が美術館に飾られるという経験がないのですごく喜ぶ。美術館と言うとちょっと敷居が高い場所というイメージがあるが、そこに「僕の作品が飾られる」というすごい喜びと、その子供達の後ろには、保護者の方が大勢おられる。親であったり、おじいちゃんおばあちゃんであったり、そういう方も喜んでくださって、一家で見に行ってください。また、ギャラリーは、学校現場の方にもお貸しいただけると大変ありがたいと思う。

それと、地域連携プログラムで、学校出前授業や地域出前プログラムは、累計が3万人を超えていてすごいなという話があったが、本当に地道に活動して下さってありがたいなと思っている。私もこの活動をもっと地域におろしていけないかと思うが、例えば地域には秋に子供達の作品展みたいなものがある。だいたいどの地域にも芸術展みたいなものがあると思う。図工美術の絵とか立体作品であったりとか、あと、書写もある。例えば、私は草津にいるが、草津だったら市庁舎で開催されるとか、大津だったら歴史博物館で開催されるとか、そういうそれぞれの市町でいろいろ開催される場所がある。そういう所にも子供達が出品されたら、皆一家で見に行かれる。そこに「アートにどぼん！」とか色んな体験美術館みたいなものをお願いしたら来てもらうことは可能か。大々的なものは無理かもしれないが、例えば一角に子供達の作品スペースがあって、その一角に体験コーナーみたいなのが設けてもらえると、子供達は喜んで体験させてもらえると思うので、そういうことがきっかけとなって、美術って面白いな、芸術って面白いな、そういう子どもたちが増えてくればいいなと思う。基本的に子どもたちは、モノを作ったり描いたりするのが本当に好き。好きっていうより、それこそ人間の欲求の赴くままというか、活動にのめりこんでいくので、学校現場では限られた時間数の中で、図工の時間は本当に減っているし、そういう子供達に何か学校以外でもアートに触れるような時間とか空

間みたいなものをつくってやっていきたいなということを日々思っている。

(委員) まず一つ目、休館中とは言えこれだけ活発に活動されているが、活動のアーカイブはどのような形なのか。例えば美術館なので年報を出すとか研究紀要を出すとか、そういう話がなかったが隔年でも出るのかなあというのは考えた。それをふと思ったのは、最初に作品調査収集とか保全管理があるけれども、事前に送っていただいた資料には作品一覧がない。作品事例がポンとあるだけなので、ここはやっぱりちゃんとしたリストを見たかった。そうすると、こういうものを入手されたということが分かる。

それから「月刊学芸員」のこともよく話題になっているが、委員がおっしゃったようにレジュメでよいので、こういうことをやりましたという記録が貯まっていくと、いい資料になっていくと思う。

それからアーカイブ関連。それがデータベースにもつながっていく。データベースの中でこの作品についてはいついつ「月刊学芸員」でどういう学芸員さんがどういう観点で、どこでどういうことを話したというのが、リンクしていくのが本来のデータベースだと思う。

もう一つ、情報発信だが最後のページに、WEBサイトの全面更新という一行で終わっているが、海外に対する発信はどのぐらいお考えなのか。ずっとお話に出ているのは国内、特に県内でどれだけコミュニケーションをとれるかだが、せっかく京都・大阪までたくさん海外の方がいらしているのに、ちょっと色々あって減っているが、そのついでに滋賀まで来て、滋賀の美術館にはこういう作品があるからこれを見に行かなくては、と文化のために来ていただくツアーリズムは、経済的な効果だけではなく、非常に豊かな結果を残してくれる。そのためにも是非、海外への発信にも力を入れてほしい。

3点目は老朽化改修工事で、収蔵庫の話はほとんど出なかったが、基本的には変わらないのか。あと、屋外の彫刻もあまり変わらないのか。

(事務局)

基本は変わりません。

(委員) 滋賀県という土地柄もそうだが、すごく僻地も多く、交通の便も悪いが、地域の文化というのは生活と密着しているのが一番大きいと思う。色んな地域がある中で滋賀県は滋賀県の伝統文化を含めた生活と美術とが密着している。さっき委員がおっしゃったように、日本の文化に触れるために外国から来た方が、滋賀県の地域の方と生活文化を供にして、何かモノを造形する。安曇川のアトスポットも、里山やそういう中に溶け込んだ文化が、滋賀県の良さにつながると思う。もうちょっと地域の持っているものの何か、周囲の文化もそうだが、そういう人達が作ったものの生活の中で風習とかそういうものに根差したものをやれば、滋賀県にしかない地域文化とアートがつながるような形を表現すると、外国から来た方に、滋賀県は他の所とは違うんだなと強調されると思う。それが滋賀の美術というか、文化の基本になればいいと思う。活動に関しては、言うことはない。

もう一つ、文化・美術というのは、子どもの教育とのつながりが一番多いと思う。子供が印象的に飛びつくような企画を学芸員の方の一つのテーマとして持ってもらえればと思う。アール・ブリュットはすごくいいが、もっと何か住んでいる方が、美術館に来るような魅力をもうちょっと強調されたい。

あと、美術館の空間のことに限っては、私も十分把握できていないが、規模は変わらないので、前から話題になっているのは、県展のスペースに対して心配する部分もある。その点またいろいろ考慮してほしい。

(3) その他

(事務局) 美の滋賀の発信について説明。

(委員) 美の滋賀については、ずっと経緯を追ってきているが、咀嚼しきれない概念だった。それを具現化するのが新生美術館だった。ですから長谷川祐子さん(元県顧問・東京芸術大学教授)が、「近現代の美術」と「アール・ブリュット」と「神と仏」、この三つの花束を束ねることによって、何かが生まれる、創造されるとおっしゃっていた。そうすると先程の説明で、文化館と美術館とは切り離して連携だとおっしゃっているが、ここで質が変わるのではないか。ここで一旦議論する考えはないのか。美の滋賀を続けるにしても止めるにしても、議論が必要じゃないかなと個人的に思う。元々、非常に曖昧だったのが新生美術館で何とか束ねていこうと、何が生まれるかも分からないが何かが生まれるかもしれない。期待しようと思えばそこにワクワク感が生まれるのではないか。単に三つ並んでいるだけじゃないかという批判的な声もあったが、可能性に賭けるという意味があったと思う。ところが今度、分離して連携ということになれば、ちょっと考え方を変えないといけないのかという風にした。そこは議論しないのか。した方がいいのではないか。

令和3年に再開館する時に、やはり再開館と書いているが、これまで「新生」美術館という概念があって、今度「再開館」になっている。それは今まで継続したことを継続してやっていくのか、出直して新たなテーマで美術館をやっけいこうと打ち上げるのかで違うと思う。それと関わってきていると思うが、あと1年間しかないのに、その辺、どう議論されているのか非常に疑問に思う。

(事務局) 確かに美の滋賀、三つを一つに束ねて一体的に据えていくという所は、今回方針転換をしようとしている。一つ屋根の下で三つを同時に見せていくということは、もうひとつ屋根ができるというようなイメージを今の段階では持っている。二つの施設が拠点となっていくという事になる。

この背景には、今年度、懇話会で議論を重ねてきたが、一つには、新生美術館基本計画を議論した時と比べて、非常に文化財を取り巻く状況が厳しくなってきたという認識があった。文化財、特に寺社等関係者の方が、まずはしっかり文化財を保存、守るということを基本においてほしいと。その上で活かしていく。それによって守ることと活かすことの循環が回るんじゃないかというような意見をいただいた。まずはしっかり保存ができる、しっかり管理ができるような施設、あるいは特に体制、これは人材ということになってくるが、そういうものをしっかり備わっているものを整備していただきたいといった意見が非常に根強くあった。そうした中で、我々としても美の滋賀、三つの美というものは発信をしていくと、この両方を実現していきたいという事で議論を重ねてきて、そのために、文化財を守るためには、しっかりした収蔵庫のスペースを持った施設が必要であり、そのための専門的なスタッフをそこに備えるということも必要であり、当然、調査も研究もしていく。さらには文化館にある収蔵品だけではなく、これから、特に滋賀県の中でも過疎が進んでいる地域があって、無住寺のような住職のいないお寺も増えてきている。今でもちらほらあるし、これからも増えていくと思われる。そうするとそういった地域で守られてきた文化財が、中々その地域の中で守っていけない、そういう危機的な状況というのが、これから深刻化していくと思われる。その時にしっかり、そういった所に手を差し伸べられるような体制というものもやっぱり必要だということで、そういったものを将来的にも備えておく。やはり施設としては、専門的

な施設が必要であろうという所へ、こういう方向に転換をしてきたという経緯がある。従って三つを一つに見せるという考え方、概念は確かにおっしゃるように転換していかねばならないが、三つを発信していく方法というのは他にもあるだろうと、そこを具体的に来年度どう発信できるのかということを進めていきたいと考えている。

(委員) お言葉を返すが、今おっしゃったのはどこかで議論されてそういう方向だとどこで決まったのか。それは、過去に委員会があって、美の滋賀というのが、華々しく高々と理念を掲げられた。具体的な形は、新生美術館でという説明を受けていた。今度形が変わるけれども、新生美術館の議論はしなくてもいいのかということをお聞きしているわけです。そうじゃなくてする必要がなく、継続ということと考えていいのか。今おっしゃった説明というのは、どこかで議論された中身なのか、それとも県の考え方か、それとも審議会か何かで議論されてそういう方向に行っているということか。

(事務局) 琵琶湖文化館を継承するための懇話会を今年度このために設置した。会長は、元美術館長もされていた石丸先生で、あと文化財の関係者の方、成安造形大学の岡田先生にも参加いただいて、美の滋賀のコンセプトという所も含めて議論いただいて、琵琶湖文化館に関しての方針ということなので、琵琶湖文化館に関しては、そういう特異性を持った施設にしていく方がいいだろうと。ただ、美の滋賀の発信のためには、近代美術館とも連携しながら発信していくというのを踏まえうえで、独立させるというのがいいのではないかとこの懇話会の中では一致した。

(委員) 大変貴重な意見が飛び交っているが、ここは美術館協議会の場です。ところが、この出席の方々には、琵琶湖文化館がこうなりますよという報告は私の記憶ではなかったと思う。そういう事が根底にあり、来年度にこの協議会で、こういう方向でもう一度行きますよ、とこの協議会の中でその事を伝えていただきたい。そういう希望的な話だと私は理解しているが、みなさんやはりいろんな意見があり、それをやり出すと相当時間をとりますが、県の方針、それから琵琶湖文化館、それを我々としてはマスコミを通して知っただけ、活字とかだけで、琵琶湖文化館は独立できるんだなど。ところが我々協議会とすれば、議長がこんな話をしてはいけませんが、我々、この美術館協議会としては、当初は幾つかの柱で走るんだよといった事で、協議会が成立した訳ですので、今日は時間がございませんので、次の協議会の時にはその辺もう少し協議会としてどう色んな意見を言える場なのか、そういう事もお伝えいただければと思っています。みなさん、こんな意見でまとめてしまいましたが、よろしいでしょうか。他にどうしても言いたいという方おられましたらどうぞ。

(委員) 議題の2は、令和2年度の事業計画についてだが、美の滋賀の発信について、変えられていると理解すればよいのか。具体的に、美術館が令和2年度に何をすることかというのはまだ伺っていないので、ちょっと話についていけない。

(委員) その辺は時間的な問題もあるので。今回この資料でいくと、展示室はこういう風に変わりますという報告だけだったかと思う。美の滋賀ということで少し説明があったが、次回持ち越しになるような気がします。

(委員) 来年度のことだが、インスタレーションなんかで使えるようにするには、音響とか照明とかも考えていただくことが必要になると思う。それと、壁面は、オルセー美術館がグレーにされたことによって印象派の作品が非常によく見えるようになったというものもあるの

で、壁面の色は考えていただきたい。それと、先程の美の滋賀の件については、一つは分館という形の発想であれば、三つの柱を崩さずに二つに分けることも可能だと思う。せっかく議論されて、三つは大事という風にスタートしたものを簡単になくしてしまうのは、まずい。分館で両方ともやるけれども本館からの巡回展を向こうでもやるというようなイメージも持ちながら、やはり大事な柱は、簡単に変えない方がいい。

(委員) 議論はこのままいくと、相当白熱しそうなのでこの辺で締めさせていただくが、本当に貴重な意見、滋賀の近代美術館に対する皆さんの強い思いを今日聞かせてもらえたと思います。この意見を参考にしながら、事務局のほうは、多分、邁進されると思います。

(終)